鳥取の民話

26

収録・解説　酒井董美（ただよし）

語り手　山口忠光さん
（明治40年生まれ）
昭和63年8月23日収録

鴨撃ちの猟師

（東伯郡三朝町大谷）

イラスト・福本隆男

あらすじ

昔、近江の琵琶湖横の猟師が毎日、琵琶湖に鴨（かも）撃ちに行っていた。

ある日。鴨を撃って、腰に縄をつけて鴨の首を挟んで先へ行き、また鴨を撃ったら、鉄砲の弾がそれ、山を歩きよった猪（いのし）に当たり手負いになって暴れまわったところ、その山から山芋が5、6貫目ほど掘れた。

猪は捕った、山芋は掘った、鴨は取った。持って帰るのにどうしようと思って、途中に預け、「日も早いことだから」とまたうろうろしよったら、全部弾が当たっとらなんだか、鴨が生きもどって、パタパタ羽ばたきしだいた。

たくさんの鴨を捕っとるわけだから、鴨の何十羽の勢いで猟師は空中に舞い上げられて行きよったところが、とうとう大阪の天王寺の屋根の上まで来た。すると鴨が弱ってしまって、猟師は天王寺の屋根へ落とされてしまった。

そこで猟師はびっくりして屋根から下りるには寺の屋根で高いし、「さて困ったもんだ」と思って、とにかく屋根のはしの方まで出て、大きな声をしたところが、下の方から何事かと思って、天王寺の小僧が、おおぜい出てきて空ぁ見上げると、鉄砲撃ちがおるものだから「和尚さん、和尚さん、たいへんなことです。寺の屋根の上に何だか猟師のようなもんがおって、『助けてごしぇ』と言っていますが、どうしましょうか」と言った。

「そりゃ助けてくれって言やあ助けてやらにゃあいけんが、困ったもんだ。どうしようかな」て。

すると和尚さんが「小僧ええことがある。布団を持ってこい」。それから、布団を持って出さして小僧に布団の四隅を持たして、「ここへ降りてこい」って合図したところが、その鉄砲撃ちが、その布団のまん中めがけてぴょーんと降りた。そうしたら、その鉄砲撃ちの重みで布団の四隅がカチーンとかちあって、昔から言うように「目から火が出る」ちゅうことがある。ちょうどその手で、目から火が出て、天王寺が火事になって焼けてしまった。

その後に何だか生えとるがと思って、見たら、その菜っぱで、それで大きんなってから見たら、その大きな蕪（かぶら）だったと。それでそのときに天王寺蕪（かぶ）という名がついた。それから以後、天王寺蕪ができたと。

そういう話で、天王寺蕪ができた由来だっていうこと。昔こっぽり。

目から火が出て天王寺が火事

解説

関敬吾『日本昔話大成』で分類を見れば、笑話の「誇張譚（はなし）」の中にあり、「鴨取権兵衛」の名前で登録されている荒唐無稽の笑い話であり、山口さんの話も大筋では同じである。

読者のみなさまも、以前どこかでお読みになった懐かしい話ではないかと思う。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。